

## 編集 後記

学会総会で議論されている話題や内容と雑誌に掲載される論文との間には話題のギャップがあります。公衆衛生は実践の学問であり、一方で学会誌掲載論文には学術性が問われるためにやむ得ないのかも知れません。ギャップを小さくするために現場の方は忙しいと思いますが現場の視点に立った論文を多く投稿いただきたいと切望しています。本号では幸い、保健所関係者から投稿いただいた論文を公衆衛生活動報告として掲載することができました。以下、最近気がかりに思っていることを綴らせていただきます。社会活動は大きく「官」「公」「民」「私」に分けられます。「官」と「私」の活動だけからなっている社会はギスギスしたものであります。「公」と「民」の組織や団体の活動が中心の存在する社会は安心できる社会ではないでしょうか。「公・民」の組織が育っていなければ「官から民」のかけ声のもとで実現される社会は「私」だけからなる社会になってしまいます。かつて母子保健活動においては母子愛育会等の団体、結核対策においては結核予防会等の民間団体、専門職からなる「保健所」という公の組織が組み合わせて公衆衛生活動が進められてきました。昨今の健康づくり対策、疾病予防対策において、官の組織ではなく「公」「民」の組織を育てることが十分にできたのか考えてみる必要があります。経済的に豊かな社会となると「公」に依存する必要性がなくなる人も多くなってきます。その一方、公、民の支援を必要とする人々も残されています。あら

### 8号予告 (第54巻・第8号)

#### 原著

Relationships of parenting strain and mental health with family needs in mothers of severely handicapped school-aged children suffering from cerebral palsy ..... Osamu NITTA, et al  
禁煙支援者の技術レベルと禁煙支援効果の分析 ..... 萩本明子, 他

ためて「公」「公衆衛生」の役割と意味合いを考えてみる必要性がありそうです。多様なNPOの活動が活発になってきているのは喜ばしいことです。特定健診・保健指導のアウトソーシングにあたっては「私」の事業化にならないように制度を育てていくことが求められます。(高鳥毛敏雄)

### 日本学術会議シンポジウム 「今後の政府統計のあり方とその有効活用」

期日 平成19年10月24日(水) 18:00-20:00

場所 愛媛県県民文化会館別館

#### プログラム

開会挨拶 岸 玲子(北海道大学大学院医学研科社会医学専攻予防医学講座教授)

座長 小林 章雄(愛知医科大学医学部衛生学講座教授)

小林 廉毅(東京大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野教授)

#### シンポジスト

福田 吉治(国立保健医療科学院疫学部疫学情報室長)

公衆衛生分野における政府統計等の二次利用の有用性と課題

祖父江友孝(国立がんセンター研究所がん情報研究部長)

がん統計における政府統計の利用と課題

橋本 英樹(東京大学大学院医学系研究科臨床疫学・経済学教授)

社会医学・政策研究向けデータの公共性についての一考察

筧島 茂(国立保健医療科学院公衆衛生政策部行政政策室長)

わが国における政府統計の有効活用について：国勢調査コホート事業の提言

閉会挨拶 實成 文彦(香川大学医学部人間社会環境医学講座教授)